

第3回 レポート

コロナ禍における沖縄の課題を知るオンライン講座
～NPOの現状を聞き、話し合い、考えよう～（全5回）

コロナ禍の地域で暮らす障がい者の今 ～ 自立生活支援の現場から考える ～

コロナ禍における地域の課題に向き合い、活動している、5つの分野の実践者からお話を伺い、それぞれの現場の現状や課題について共有するためのオンライン講座を開催した。

第3回講座概要

- ・ 日 時 2020年6月12日（金）19:00～21:00
- ・ 参加者 9名
- ・ 講 師 國場 正樹氏（NPO法人PAIおきなわ 代表）
早坂 佳之氏
（NPO法人沖縄県自立生活センター・イルカ 職員）
- ・ 聞き手 岩田 直子（NPO法人まちなか研究所わくわく 理事）
- ・ 板 書 宮道喜一
- ・ 主 催 NPO法人まちなか研究所わくわく

ープログラムー

- ・ オリエンテーション
- ・ 講師より情報提供
- ・ グループワーク1（自己紹介、感想共有、質問づくり）
- ・ 質疑応答
- ・ グループワーク2
- ・ グループ発表
- ・ 講師コメント
- ・ 板書ふりかえり

情報提供

1. NPO 法人沖縄県自立支援センター・イルカの紹介、活動

- ・ 早坂さん：約20年イルカへ関わっている。
- ・ 自立生活センターは、アメリカのバークレーで、1970年代に生まれた団体。重度の障がい者が地域で暮らすためのセンター
- ・ 日本に現在123団体あり、沖縄に5つの自立生活センターがある。イルカは沖縄で最初に設立され、法人化して昨年20周年
- ・ 3つの特徴。①障がい当事者による運営、②重度障がい者が地域で自立した生活ができるよう活動する、③自己選択・自己決定・自己責任に基づく自立

- ・ イルカの事業は、自立生活プログラム、ピア・カウンセリング、相談支援事業等を行い、障がいのある人もない人も共に暮らしやすい社会をつくる活動、インクルーシブな社会を目指して活動をしている
- ・ 活動の紹介：バス通勤・乗車体験、子ども交流広場・駄菓子のイルカマート、ロシアクラブと読み聞かせ、カラオケ、ビーチパーティー、デンマーク学生との交流、医療的ケアが必要な子どもセミナー、20周年記念パーティーなど
- ・ 新型コロナの影響で、活動すべてがストップしてしまった

2. NPO 法人 PAI おきなわの紹介、活動

- ・ 國場さんは、21 歳のとき障がいもち、イルカと出会い、ヘルパーや派遣事業所を立ち上げるなど取り組んできた
- ・ 現在、PAI では、重度の障がい者を中心にヘルパー派遣を行っている
- ・ イルカと同じ事務所にあり、連携をとりながら事業に取り組んでいる
- ・ 利用者は、最重度の方がほとんど。地域での生活を支える最後の受け皿として覚悟をもって活動している

3. コロナ禍の対応

- ・ 自立生活センター（事業所）としての責務
 - 感染が拡大し重篤な感染者が増え人工呼吸器等の医療機器、アルコール、マスク等の資源が不足してしまうことで、「命の選別」が行われる事態を防ぐ為のあらゆる策を講じる
 - 感染に関わる事他いかなる差別やデマに対しては徹底して許さない
 - 信ぴょう性の高い情報を得、重要な決定には理事会が責任を持って行う
 - 他センター、他機関とも情報を共有し、必要時の協力体制の構築をはかる
 - 利用者、介助者、職員、家族等関係者を感染から守るため管理徹底する
 - 利用者が感染しても徹底して生活、生命を維持するためのあらゆる方策を尽くす
- ・ 新型コロナへの対応（全体）
 - 2月～3月は現場での対応
 - 4月5日に事業所内対策チーム立ち上げ（以後6月3日まで毎週）
 - 4月6日～重篤化する恐れのある人（スタッフだけでなく、スタッフの家族や同居している人全て）の割り出し、生活介護閉所、在宅介護切り替え、事務所勤務の制限、可能な限り在宅ワーク、来所者

の外での対応

- 常時マスク着用
- 換気、触るところの毎日の消毒
- 毎日の検温、体調変化の報告（Google フォームを活用）
- プライベートも含めた自粛のお願い
- 防護物品の管理
- 全国組織（全国の自立生活センター）との連携→政府機関への要望。全国組織からアドバイスももらった
- ・ 入口は1か所のみ開閉。手指消毒、入所記録義務の徹底
- ・ 事務所内では、飛沫を防ぐことを目的として、換気の悪い部屋ではビニールでスペースを区切った
- ・ 海外のセンター、台湾のセンターから防護服やメガネ、シャワーキャップなど物品提供を受けた
- ・ 県内感染者数の表示。人数の把握を行った
- ・ 重度障がい者の一人暮らしの自宅へヘルパー派遣を行う。基本的に、利用者とヘルパーが1対1
- ・ 新型コロナへの対応（介助）
 - 入室の際、消毒して入室
 - 玄関に消毒液を置く。入室後手洗い
 - 利用者とは距離を置き、必要意外は近づかない
 - 一回介助一回手洗い
 - マスク着用徹底
 - 排泄時の徹底消毒手洗い
 - 介助終わった後も手洗い消毒
 - 手洗いした後のタオルはできれば使い捨てのペーパーを準備する
 - 定期的に換気を行う
 - 介助が終わったら直行直帰をする
- ・ 県内感染者が100名を超えた場合は、防護服の着用

・ 新型コロナへの対応（所内感染者、疑い、接触者が出たら）

- どんなことがあっても、介助をストップさせない
- 介助者への同意書
- 濃厚接触（可能性あり）の確認
- 全介助シフトの固定化（原則1介助者1利用者）→目指したが、持病持っている介助者や奥さんが妊娠中、高齢者がいるなどで介助ができない人も出てきて、完全な固定化は無理だった。医療ケア必要な利用者は固定化した
- 保健所、特定病院等関係機関とのやり取り・保健所報告、事務所の完全封鎖→医療ケアが必要な利用者が発熱した場合について保健所へ相談したが、協力病院と保健所のやりとりで様子を見るしかなく、保健所と病院の対応をあきらめた
- 介助者のホテル、体験室での寝泊まり
- 利用者をベッド周りで隔離（陰圧、陽圧室）

・ 新型コロナへの対応（課題）

- どうやって情報の格差を埋めるか→全体LINEの整備、映像や画像をつかった説明、チャート、担当固定→130名以上の従業員と50名の利用者へどうやって正確な情報を伝えるか。介助者への説明の方法と利用者への説明の方法をそれぞれつくる必要があった
- 在宅介護切り替え・シフト固定・小学校等の臨時休校による介助者偏り&不足→コーディネーターと密なやり取り、無資格者特例措置、36協定特例措置、リモート研修、補償制度の活用→小さい子どものいるスタッフ多く、働き方悩んだ。全国組織へ情報を求め、国にQ&Aを投げかけて、厚生労働省からの回答を早急に得ることができた。派遣事業で資格無

くても派遣してOK。請求してOK。時間数足りない人もオーバーしても算定してよい、など。市町村へ伝えて、柔軟に対応してくれた

- 防護服の暑さ対策
- 一人一人の人権をどう守っていくか（感染（疑い含む）者、濃厚接触者、地域、職業など）→ハンセン病の経験を生かす
- 本人、家族に症状があってもいいづらい状況をつくらない

4. 一人ひとりの人権をどう守るか

- ・ 感染症が蔓延した際に、人権的な問題が起きてしまう。ハンセン病のときと同じことがおきている。当事者や研究者が指摘
- ・ 感染者、疑いある人、広がり出てきている地域、職業上の差別がいたるところで起きている
- ・ ハンセン病の経験を伝えていく活動がコロナでストップしてしまっているというもどかしさ。リモートでも伝えること大事。
- ・ 正しく恐れていくこと。人権的な観点で、コロナへ対応していくこと必要
- ・ 人権問題は様々な分野の垣根をこえた問題。根っこはいっしょ
- ・ 人権意識をもって取り組むことが必要であり、人権上の配慮がない中では、感染したかもしれないと思っても、言うことができず広げてしまうことが懸念される

5. 生活のなかで変わったことは？

- ・ 2か月在宅となり、家族と介助者以外と会わない生活によって、事務所にくる生活に戻ることが大変（特に知的、精神障がいのある方）
- ・ 日頃のルーティンできないことが苦痛だったと思う
- ・ ZOOM等のリモートによって排除されている障がい者もいる

質疑応答

Q1. 利用者がコロナ感染を恐れて、利用をためらった場合の対応は？

：利用者へ聞き取りをした。在宅で生活している重度障がい者は、在宅なので、ウイルスを持ち込むのは介助者となる。事業所内で感染者が出た場合は、親元や兄弟のもとへ避難するという人とそのまま介助の継続を希望する人に分かれた。

Q2. 無意識に差別しているかもしれない。どう向き合うか？

：誰でも差別する側、される側になりえる。今回の新型コロナのことで明るみになった。一人ひとり当事者になる可能性がある

Q3. オンライン格差への対応は？

：難聴の人もいる。マスクが使われることで、口を読み取ることができなくなった。透明マスクを配ったりしていた。字での会話。オンラインでも手話ではコミュニケーションとれる。知的障がいの方は直接話をすることで情報格差を埋めることをしている

Q4. 介助の時間が減ったり、介助者が変わったことに関する利用者へのケア

担当するスタッフ（コーディネーター）と話し合い、マッチングした。この人とこの人なら長時間・期間でもいける、等。しわよせがきちゃうのは軽度の方だった。慣れない方だけお願いします。もともと皆24時間ちかい介助を受けているので、常に人がいる事は苦ではない。人に対することよりも出られない、移動できないストレスが大きかった

Q5. 命の選別させないことに関する対策は？

Q6. 呼吸器を使っている重度の方から、呼吸器が足りなくなるのでは、などの声はあった？

：呼吸器はその人専用の設定があるので、外して他の人に使うことは考えにくい。海外で、ダウン症などの呼吸器以外の障がいある人に必要となったときに、若い健常人に呼吸器をつける、という報道があった。DPI から国へ要望書を出した。

(感想)

- ・ 人権問題につながっていくこと。原因を求めていくことによって、差別を生んでいくのでは
- ・ 八重山・やいまのハンセン病感染
- ・ 軽度の方のケア、家族のケアで過ごしている方が取り残されることもあるのでは
- ・ リスクを想定して独自に対策をとっていて、誠心誠意利用者寄り添っている
- ・ 普段から危機感をもっていたから迅速な動きができたのでは



第3回講座の様子

参加者セッション2

今が分岐点?! 新しい関わり合いのカタチを描いてみませんか

- ・ 介助の方がすごいな、と。密に、利用者に逐一聞いてされていることがすごい。本人が決めること、選択することを大切にしている
- ・ 制度ももちろん大事だが、地域へいかに開くかも大事
- ・ 関係者や関心層以外には、自立生活支援の現場をみる機会が少ない。もっと自然と目に入って来るにはどうすればいいだろう。そこを開いていくことをどうするか
- ・ 障がい者/健常者、マイノリティ/マジョリティという区分をこえて、コロナで同じく不自由なことを経験したのとして、新しい価値観や暮らし方を見つけ出せるといい
- ・ 「障害者手帳」の郵送対応など、これまで求めがありつつも、踏み出せなかったものが、今回のコロナ対策で一気に進んだ。他にも障がい者などが訴えてきたものです。すんだ動きにも着目して、その前に進める

講師コメント

國場さん

- ・ 福祉業界だけでなく、医療関係者など、様々な問題がこれからどんどん出てくる。障がい者だけの問題ではなく、みんなの問題となる
- ・ コロナあったことで気づけたことも多い。
- ・ 感染症に対する意識が大きく変わった年。みんなで次のステップへ行けるとよい

早坂さん

- ・ 主体は誰なのか。障がい者を主体としたやり方を考えていかないといけない
- ・ 障がい者は地域の一員に入らないのか。そもそも地域の中に生きている、を当たり前にもっていきたい
- ・ 重度の障がいの人はコロナ前からリモートで働いていることが当たり前。進んでいる部分もある。強みを生かしていければ
- ・ 新しい形を一人ひとり模索していく。これから。障がい者の力も生かし、地域の中でみんな生きていきましょう

アンケートの声

1. アンケート概要

- アンケート回収 4 名 (回収率 44%)
- 満足度 平均 4.3 (5 点中)

満足 (5 点)	概ね満足 (4 点)	ふつう (3 点)	あまり満足でない (2 点)	不満足 (1 点)
1 名	3 名	0 名	0 名	0 名

2. 満足度の理由

(満足 : 5 点)

- 他で知ることが出来なかった、介助現場について、多くを学べたので

(概ね満足 : 4 点)

- セッションの時間配分、テーマ設定

- コロナをキッカケとして、人との関り方を見直すキッカケになった。現場の最前線で動く方から、リアルな声が聴けた

3. 講座の感想

- 誰が主体者かという問いかけ コロナでなくても本人を置き去りにしていることが山のようにあるなど感じました
- 障害の有無関係なく、「主体はどこにある？」が印象的だった
- 実際の介助の様子を見られたことが、今後に生かしたい教訓になりました
- 情報提供された団体の、平常時からの意識の高さ

板書記録

① コロナ禍における沖縄の課題を知る オンライン講座
 ~NPOの現状を聞き、話し合い、考えよう~

5分野課題を話し合う参加型講座

6月10日(水) しんぐるまざあず・ふかーら石神 秋吉 剛 氏
 6月11日(木) 沖縄キョーバール友好協会 クラクスマン オジマ 氏
 6月12日(金) NPO法人 PATおきなわ 國場 正樹 氏
 6月15日(月) ももやま子ども食堂 石原 剛太 氏
 6月18日(木) 沖縄県福祉支援センター 松川 中村 仁学 氏

2020年6月12日(金) 19:00-21:00
 コロナ禍における沖縄の課題を知るオンライン講座【第3回】~NPOの現状を聞き、話し合い、考えよう~

コロナ禍の地域で暮らしが困難な人々の今
 ~自立生活支援の現場から考える~

【講師】
 國場 正樹 氏 (NPO法人PATおきなわ 代表)
 早坂 佳之 氏 (NPO法人沖縄県自立生活センター・イルカ 職員)

経緯
 NPO 密着の緊急アンケート
 NPO の事業継続への影響
 支援の必要個人が増えて受入れ
 新2波へ備え、コロナ禍(2020年) 起きていることを知る

「名前の変更」を、
 休憩背景を選択
 話すとき以外にミュートは
 質問はチャットへ入力も、
 ビデオは「オン」にしておいて

コロナ禍における沖縄の課題を知る
 オンライン講座 5分野

②

参加者へ質問
 ぼじめて2名
 オンライン講座 → 5名
 県外から → 2名
 3回参加 → 川中 現場の声をききたい

特定非営利活動法人 まちなか研究所 わくわく
 2004年設立
 参加の場づくり
 コロナ禍 新しい参加の形も。

プログラム
 19:00 オリエン
 19:05 話題共有
 19:50 グループワーク①
 グループワーク②
 発表
 講師コメント
 板書振り返り
 21:00 終了

講師
 国場正樹 氏 (NPO法人PATおきなわ代表)
 岩田進子 氏 (おきなわ障がい福祉センター 理事)
 早坂佳之 氏 (NPO法人沖縄県自立生活センター 職員)

進行
 金城隆子 氏
 板書
 宮道 氏

早坂 氏
 20年ルカで、
 コロナ対策チームとして

国場 氏
 21:00まで障がいとそれ以外へつなぐ。

読みかせ
 カラオケ
 活動
 ビーチパーティ
 テンマーク
 学生との交流
 インクルーシブ教育

自立生活センター・イルカ
 1990年代 3メカ・バーガー
 123の団体(20年) → 5つのセンター(24年)
 昨年20周年
 『華やか』当番者による運営
 重慶障がい者が主眼で自立生活

自立 → 自己選択
 ・ 決定
 ・ 責任

インクルーシブな社会を目指して

医療的ケアが必要な子セミナー
 20周年記念パーティ
 全てSTOPした！ コロナ

注3回 コロナ禍の地域で暮らしが困難な人々の今
 2020.6.12 コロナ禍における沖縄の課題を知るオンライン講座(収録あり) 5名

3

PAI おきなお

最重度の方の自立生活を支える、
イルカと同じ事をする

責務
新型コロナウイルスによる
命の選別が行われる事態に備える

対応

- 2~3月
- 4/5 対策チーム 立ち上げ
- 4/6 ~ 現在
 - 重症化するおそれのある人がおられる在宅ワーク、来所者の対応
 - マスク着用 検温 検温
 - プライベート領域の自衛 防衛物品
 - 県内感染者100名を超えた場合

- 全国への連絡 → 政府への要望
- 台湾のセンターから物品提供
メガネ・シャワーキャップ...
- 介護者
ヘルパーハカシ 消費税込入室
重度1対1ヘルパー 一介助一歩洗
濯時〜

情報格差

● 130名 スタッフ
● 50名 利用者
→ 情報を伝える
→ 依頼の情報提供
→ 依頼の依頼

● 全国組織から国へ
● 資格なくてもハケンOKなど

※3回 2020年7月の地域で暮らす障がい者の会
2020.6.12 コロナ禍における地域で暮らす障がい者のオンライン講座 (収録時間: 25)

4

人権をどう守るか

ハンセン病のときと同じことが
おきている、重要
様々な差別がおきている (今コロナ)
伝えていく必要がある
リモートでも伝えること大事

子ども 教育
人権 分野で押し付け
権、ではない、LX

生活のめ、たては?

- 2ヶ月家 (在宅)
- 事柄所へくる生活の戻りた人へ
(知的 精神 障がいの方)
- 日曜のルーティンでやる
- Zoomでリモートで実施されている
方もいる

ブレックスセッション 1

感想共有
質問づくり

Q. オンライン格差への対応

難聴の方
マスクで口話より見やすい
てう明なマスクをした
字での会話
手話 → オンラインで使われる

Q. 利用者で、利用者の3つを
対応

ききとりした → 家族へ伝える
在宅・重度 1人で生活する
ウイルスも、てくるのは介護者

Q. 人権・無意識
差別にどう向きあうか

誰にも差別が刺さる
ヒソヒソと当事者に
可能性ある

感想
ハンセン病からの人権問題
原因求む2つで差別へ
軽度の人がこのこと
可能性

リスク想定
対策して
利用者へ
お伝え
せたいこと

Q. 介助の時間へ、在り
人々の変化への

コロナで介助の時間、
コロナで介助の時間、
コロナで介助の時間、
コロナで介助の時間、

Q. 命の懸けを
人々へ、はすして他人
に押し付け
DPI日本会が命の懸け
を、家型、

※3回 2020年7月の地域で暮らす障がい者の会
2020.6.12 コロナ禍における地域で暮らす障がい者のオンライン講座 (収録時間: 25)

5

左巻きの動画

バスへの
車でのいせりか、
分り易い → 自分でできる
了パート
料理 ほとんど、おぼろ
仕事

100%IA
では
障がい
介助



ブレックスセッション 2

感想共有
質問づくり

今が分岐点?!
新しい関わり合いの
カタチを描いてみませんか

◎ 介助の方がすごい
◎ 利用者へ寄り添って
◎ 得意配りな関わり相談
本人が居るたいを配りな
制度はもう大事
◎ 地域へへかに伝えるか

◎ 関係者たちへ伝えて
◎ 現場がみえようとした
◎ 不自由 (コロナで)
◎ 新しい価値、くらし
しるが、者手さうの
◎ 介助ワーク
い、せりか、人々、も
ある

◎ テーマ: 新しい関わり合いのカタチ
◎ コロナで、サポーターの
介助が必要

◎ 主体は誰なの?
◎ 障がい者は地域へ
入るべき
◎ 地域で暮らす
◎ 重度の人へリモートが
あたりまえ、踏み

◎ 国場
◎ 福祉業界は
◎ 様々な問題
◎ 個人個人の
◎ コロナで、
◎ 社会、

※3回 2020年7月の地域で暮らす障がい者の会
2020.6.12 コロナ禍における地域で暮らす障がい者のオンライン講座 (収録時間: 25)